

3月

【収蔵品紹介】

『美術盆栽図』

(明治25年 F-100)

今年も2月8日から8日間の「第99

回国風盆栽展」が東京都美術館にて開催されました。遡れば、第一回目となる「国風盆栽展覧会」の開催は昭和9年(1934)のことでした。当時「美術の殿堂」と評されていた「東京府美術館」を会場とし、広く一般に閤口を開いた展覧会として盆栽史上に画期をなしました。

これより40年以上前、明治25年

(1892)3月11日〜13日の3日間、東京

向ヶ丘(現文京区)の料亭「神泉亭」において「盆栽美術大会」が開かれました。この会は、当時流行していた煎茶会における書画骨董陳列の一部としての盆栽陳列とは異なり、盆栽を主役とした特筆すべき陳列会でした。本号では、この「盆栽美術大会」の図録として制作された『美術盆栽図』をご紹介します。

本書は3冊構成で約

120鉢の盆栽と鉢植えが描かれています。参会者に配布された少数数の冊子とみられ、刊記(奥付)が無く、発会の情報のみ最終巻巻末に記されています。会主として盆栽愛好家で実業家の田口旭松、発起人として清大園の清水藤吉、彩花園の保坂金次郎、百草園の平井新次郎、芝花園の内山仁三郎、苔香園の木部米

吉、珎珠園の伊藤彦右衛門、香樹園の鈴木孫八の7名、さらに協賛者として巣鴨や染井、赤坂、千駄木などの30園が名を連ねています。発起人はいずれも、当時の盆栽界をリードしていた有力な園でした。

この時代、写真図版はまだ普及していません。そのため、日本画家・高森碎巖(1847〜1910)による写生画が掲載され、盆栽図の脇に樹種、盆器、所蔵者の情報が小さく添えられています。明治期に盛んにおこなわれた煎茶会の目録や図録にも盆栽が描かれますが、これらが陳列席・展観席の席飾りの図を中心に構成されるのに対し、本図録では一点一点の盆栽が主眼となり、見開き頁で大きく描かれていることが特徴です。当時流行していた文人盆栽の幹姿、枝配り、幹肌などがつぶさに写し取られ、それぞれの個性が際立っています。

盆栽の出品者は盆栽園と個人で、最終巻の後半には内山長太郎ら6名の「盆栽会審査員」が名を連ねていることから、審査に基づいた陳列会だったとみられます。後年の国風盆栽展に連なる盆栽美術展の先駆けともいえる会の図録であり、貴重な資料といえるでしょう。

(大宮盆栽美術館 主査 菅原千華)

※本資料は、3月21日(金)から開催予定の「【歴史と文化】盆栽クロニクル一年代記」(企画展示室)で展示予定です。

